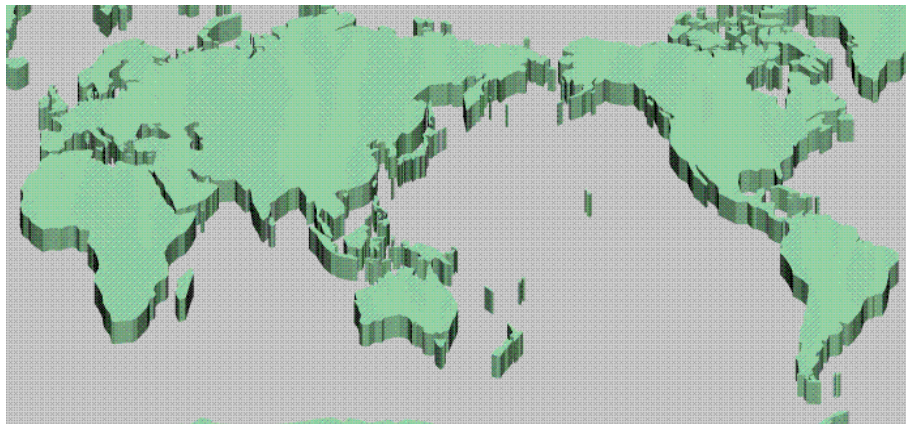


ニュースレター 第5号

2009年8月発行

科学研究費補助金基盤研究(A)

大学における宗教文化教育の実質化を図る システム構築



目次

1. 各グループの活動報告	2
2. 2009年度第2回検討委員会報告	2
3. 2009年度第1回全体会議報告	3
4. 報告(1)「宗教と社会」学会テーマ・セッション ..	5
5. 報告(2) 国際シンポジウム	6
6. おしらせ 国際研究フォーラム	7

1. 各グループの活動報告

◇第2グループ

6月7日に「宗教と社会」学会のテーマ・セッションの一つとして、「教育資源としての〈宗教文化〉—宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか?—」を主催した。(5頁に詳細)

また、9月20日(日)開催の国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」の準備等を行った(フォーラムの案内は、7頁を参照)。

◇第3グループ

カリキュラム・モデルを作成し、本科研プロジェクト・メンバーの各大学の授業をあてはめてもらい、16単位という必要単位数が妥当であるかを検討した。これにより、パイロット校とカリキュラムについて具体的に話し合う準備が整った。

また、グローバル化とともに企業の被雇用者が多民族化した場合、宗教面ではどのようなことに配慮が必要になるかについて参考となる資料を翻訳した。イギリスのNPO団体ACAS(Advisory, Conciliation and Arbitration Service、出資者は政府機関であるBIS)が作成した「雇用者と非雇用者のためのガイドブック 宗教・信仰と職場」である。2003年に定められた「宗教・信仰に関する雇用平等規定」を受け、採用過程や勤務中に宗教差別・ハラスメントが起きないようにするにはどうしたらよいかを具体的に説明したガイドブックである。ACASからの許可を得て、翻訳(PDFファイル)を本科研のHPと大正大学総合宗教研究所のHPを通して無料配

布できることになった。

さらに、異文化間教育としての宗教文化教育には、知識以外にどのようなスキル・態度の習得が求められるか、それはどのような教育方法により達成できるかを研究するにあたり、東京学芸大学国際教育センターの佐藤郡衛教授(異文化間教育専門)にインタビューを行なった。

◇第5グループ

スリランカ寺関西、甕山道大阪および神戸道場、天道教神戸教区、大阪佛光山寺、茨木モスク、カトリック住吉教会の調査を行った。なお甕山道とは終末論的教義を持つ韓国の新宗教で、天道教は同じく韓国の東学に連なる新宗教である。茨木モスクはそこに集うムスリムの8割を学生が占めるという点で特異といえ、またカトリック住吉教会では毎年10月に在日ペルー人を中心に「奇跡の王の祭り」が執り行われていることが注目される。秋以降は、愛知県下におけるモスクならびに、南米出身者の結集するキリスト教会の実態調査を行なう予定である。

◇第6グループ

8月10日に国際シンポジウム「Education on Religious Cultures in University Curricula〈大学における宗教文化教育〉」を開催した(シンポジウムの詳細については6頁を参照)。

2. 2009年度第2回検討委員会報告

今年度より組織された検討委員会の第1

回会議が下記のように開催された。

日時：2009年6月13日（土）14：00～16：00

会場：大正大学5号館4階閲覧室

出席者：井上順孝、高田信良、平藤喜久子、藤原聖子、星野英紀、三木英、弓山達也

議題

1. パイロット校について

すでに正式な手続きを始めている大学、検討を開始した大学等についての報告があった。

2. 履修単位について

全体で16単位とするが、3つの到達目標のそれぞれに見合った科目の最低単位を2単位もしくは3単位に引き下げるのが現実的ではないかと意見が出され、その方向で検討することとなった。

3. 認定試験について

5択が原案であったが、5問中2問が正解という形式に変えるという方針が出され、了承された。

4. 委託機関・認定機関について

宗教文化士認定機構を考えるべき段階に至ったことが議論された。複数の大学の研究所・プロジェクト・学科等の連合による認定機関を形成するのが現実的ではないか、という意見が出された。

日本宗教学会、「宗教と社会」学会との関係についても議された。

5. 教材について

第2グループから、オンライン映画データ

ベース（宗教文化に関わる映画の基礎情報）を作成中であること、および辞典、教科書等で参考文献として挙げられている書籍を中心に、参考図書に関するデータベースを作成中であることが報告された。

6. 連携研究者について

東京外国語大学の丹羽泉氏を加えることとした。

3. 2009年度第1回全体会議報告

日時：2009年6月13日（土）16:00～18:30

会場：大正大学5号館4階閲覧室

出席者：研究代表者の星野英紀（大正大学教授）のほか、研究分担者・連携研究者・研究補助者を含め、計17名。

議題

(A) 検討委員会関連議題の報告

井上順孝氏より、検討委員会において取り上げられた委託機関の組織構成、資格取得までのプロセス、認定試験問題などに関する事項が報告された。

(1) 委託機関「宗教文化士認定機構」の組織

複数の大学もしくは大学の付置機関等（学部・学科・研究所・プロジェクトなど）で認定機構を組織し、諸学会はそれと連携するような形態にするという提案がなされた。

(2) 運営委員会の組織

連携学会や認定機構に加わる機関から各数名程度が参加する運営委員会を、認定機構内に構成する。さらに、その委員の中で

実施委員会を組織し、具体的な活動を行なっていくことが提案された。なお、これらの委員会の運営をサポートしていく上で、最低2名の研究員が必要になるのではないかと、提案された。

(3) 資格取得までの流れの素案

科目・シラバスの認定から学生の資格取得までのプロセスについて、以下のような提案がなされた。

①認定機構と参加大学・学部等との間での資格についての相互確認

②対応する科目表・シラバスを認定機構へ提出

③科目表等の承認後、学生に告知

④所定の科目の単位取得もしくは取得見込み

⑤認定試験の受験

⑥認定機構より受験者へ合否の通知（必要に応じて大学の関連部署にも）

⑦「宗教文化士」資格の取得

（以上の流れについては、5頁の図を参照）

(4) その他の報告事項

そのほか、単位履修関連の事項、認定試験のサンプル問題の配布、試験の実施スケジュール、教材開発、広報活動の進め方等についての報告および提案がなされた。

(B) 各グループの今年度の活動について

各グループの今年度の活動が報告され、以下の事項が確認された。

(1) 研究グループの再編成については、早急に当該のグループが改編案を提出

(2) 各グループの今年度の主な活動予定

第2グループ：国際研究フォーラムの開催（2009年9月20日、國學院大學）

第3グループ：教育学の分野との連携の摸索

第5グループ：主として日本におけるイスラームや南米系・韓国系の宗教調査を実施し、データベースを作成してメンバー間でその成果を共有

第6グループ：国際シンポジウムの開催（2009年8月10日、国立民族学博物館）

(3) 連携研究者の追加の件

(4) ニュースレターについては、5月に第4号を発行したが、今後は検討委員会のメンバーを中心に原稿のチェックを行なっていく

(5) 本取組を一般社会に対して広くアピールするために、プロジェクト全体による講演会ないしシンポジウムを開催

(C) 今後の検討事項等

全体討議の結果、下記が確認された。

・学部・学科だけでなく、教員たちのプロジェクトなども資格取得への参加の対象とする。

・大学間のコンソーシアムや単位互換制度等の利用も検討していく。

・最終試験は年2回実施する（5月と11月などが想定される）。

・到達目標と認定科目の内容の一致については、参加する大学側の判断に委ねる。

・パイロット校はすでに挙がっている候補校が主となるが、そのほかにも申し出があった場合は依頼する。

以下の事項については、今後のさらなる検討の必要性が確認された。

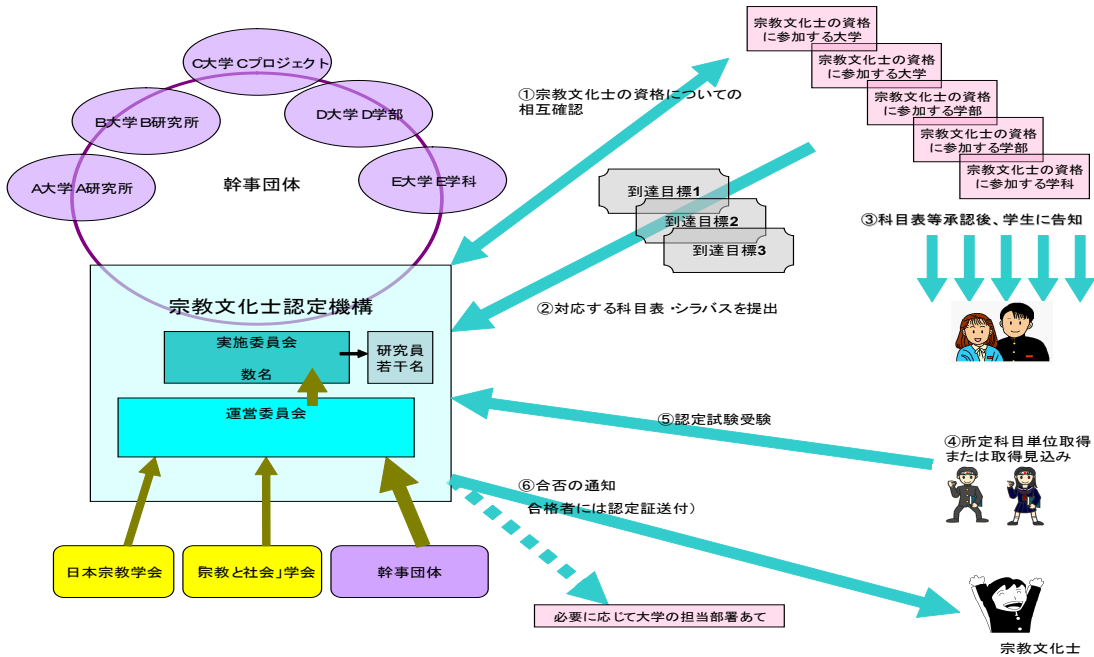
・認定機構を構成する基幹大学に所属するメンバーと運営委員会の委員との関係

・宗教文化士認定機構への参加についての大学当局への説明など

・文部科学省や日本宗教学会等の学会からのサポートに関する問題

・「臨床心理士」や「社会調査士」といった先行する資格についての情報収集

認定機構と認定のプロセスに関する流れ図（案）



4. 報告(1)

◇「宗教と社会」学会テーマセッション

「教育資源としての〈宗教文化〉—
宗教文化教育はどんな学問領域に関
わるか?—」

日時：2009年6月7日（日）14：00～
17：00

会場：創価大学

企画者／司会：井上順孝（國學院大学）

発題者：野原佳代子（東京工業大学）「言
語学、翻訳理論の立場から」

平藤喜久子（國學院大学）「神話学の立場
から」

牧野淳司（明治大学）「中世文学の立場か
ら」

山田岳晴（國學院大学）「建築学の立場か
ら」

コメンテーター：岩井 洋（帝塚山大学）

本セッションは、大学における宗教文化教育を、宗教学関連の学問分野のみならず、より広い学問分野との関係から見直すことで、その広まりと深まりを目指すことを目的とした。

2009年度は本科研の2年目にあたり、初年度の研究成果を踏まえて、さらに具体的な問題把握に努める段階になっている。その一環として、本パネルでは、大学における宗教文化教育を幅広い学問領域から考えていくために、言語学、神話学、文学、建築学の専門家を招き、自身の学問分野と宗教文化教育との関わり合いについて報告してもらった。「宗教文化」とは、高等教育の場において、多様な学問領域から取り上げられる対象である。その意味で、「宗教文化」とは、教育にとっての1つの資源と見なすことができる。しかしながら、「宗教文化」をめぐるさまざまな分野

における研究や教育の問題について、こうした観点から横断的に議論する機会は乏しかった。そこで今回のテーマ・セッションでは、発題者として「宗教と社会」学会の会員ではない研究者も招き、各学問分野の教育現場において、宗教文化教育に関わるテーマが、どのように扱われているのかを紹介してもらった。

各報告は、今後の本取組による宗教文化教育の推進にとって示唆に富むものであった。そして、フロアとの質疑応答も活発に行なわれ、大変有意義なテーマ・セッションとなった。

5. 報告(2)

◇国際シンポジウム

Education on Religious Cultures in University Curricula < 大学における宗教文化教育 >

日時：2009年8月10日（月）10：30-17：30

場所：国立民族学博物館 2階第4セミナー室

主催：科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

*本科研第6グループが主催

プログラム：

座長：井上順孝（國學院大學）、稲場圭信（神戸大学）

午前の部

挨拶：星野英紀（大正大学）

問題提起：井上順孝（國學院大學）

発題

Peter Clarke（オックスフォード大学・King's College 名誉教授）

Louella Matsunaga (SOAS)

田中雅一（京都大学）

Ronan Pereira(ブラジリア大学)

午後の部 I

Sarfaro Niyozov (トロント大学)

稲場圭信（神戸大学）

徐正敏（延世大学）

岩井洋（帝塚山大学）

Shamsul Amri Baharuddin（マレーシア国立大学）

午後の部 II

Benjamin Penny（オーストラリア国立大学）

Wendy Smith（モナシュ大学）

中牧弘允（国立民族学博物館）

全体討論

討論者：澤井義次（天理大学）、矢野秀武（駒澤大学）

使用言語：英語

URL：<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/oshirase/20090810.html>

討議の概要

まず研究代表者である星野英紀氏の挨拶があり、つづいて井上順孝氏の問題提起の後、12名の報告が続いた。30分の報告が6名（Louella Matsunaga、Ronan Pereira、Sarfaro Niyozov、徐正敏、Shamsul A.B.、Benjamin Penny）、15分の報告が6名（Peter Clarke、田中雅一、稲場圭信、岩井洋、Wendy Smith、中牧弘允）であった。

最初に外国人による8件の報告をごく簡単

に紹介する。

ピーター・クラーク氏（オックスフォード大学）は宗教が多方向的にグローバル化する現状では40年前の宗教教育モデルに代わる新しいパラダイムが必要であり、自己の伝統を理解するためにも他者の宗教理解は欠かせないと主張した。

ルエラ・マツナガ氏（ロンドン大学 SOAS）は、イギリスにおける宗教人類学の教育について紹介し、それが抱える現状の問題点をくわしく指摘した。

ホーナン・ペレイラ氏（ブラジル大学）はブラジルでは宗教教育が国民の権利となっていて、そのための教師を公的に雇用しなければならない制度がいきている国情を紹介した。

サルファロズ・ニョゾフ氏（トロント大学）はトロントの学校におけるムスリムの生徒に対する教育を取り上げ、教師の側の観点に注意を喚起した。そこではグローバル化や多文化に直面するイスラームやムスリムに対して、西洋中心の教育が抱える問題点が多く指摘された。

徐正敏氏（延世大学）は韓国におけるキリスト教系の大学を中心に、高等教育における信仰の問題を取り上げて論じた。

シャムスル氏（マレーシア国立大学）はマレーシアの宗教教育においてはイスラーム教育が初等・中等教育では義務となっていて、非ムスリムに対しては「道德教育」がなされていると報告した。

ベンジャミン・ペニー氏（オーストラリア国立大学）は「リラックスした世俗主義」と形容するオーストラリアにおける初等から大学にいたる学校で宗教がいかに教えられているかを概観し、ウェンディ・スミス氏（モナシュ大学）はジェンダーや企業と関わる宗教の問題を自分の講義を例に紹介した。

次に日本人による報告であるが、これはすべて2008年度に実施した本科研の海外調査についてであった。田中雅一氏はイギリス、稲場圭信氏はカナダ、そして中牧弘允はオーストラリアについて、それぞれの要点を語った。

討論者として澤井義次、矢野秀武、またオブザーバーとして藤原聖子、黒崎浩行、平藤喜久子の諸氏も参加した。

（文責：中牧弘允）

6. お知らせ

◇国際研究フォーラム

「映画の中の宗教文化」

日時：2009年9月20日（日）10:00～17:30

場所：國學院大學・学術メディアセンター1階・常磐松ホール

主催：國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

発題者：

近藤光博（日本女子大学）「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする——ひとつの試みの報告」"A Tentative Report Examining Theoretical Issues of Comparative Religion Through Film Usage as Teaching Materials"

中町信孝（甲南大学）「アラブ歴史映画に見るイスラームとナショナリズム」"Islam and Nationalism as Seen in Arab Historical Film"

Jolyon Thomas（米・プリンストン大学）「西洋から見た日本映画の宗教性」"The Religiosity of Japanese Film as Seen From the West"

Jean-Michel Butel (仏・INALCO): 「アニメはどんな宗教を語ってくれるか—『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」 “The Image of Religion in Anime: Everyday Religion in Pompoko”

Gregory Watkins (米・スタンフォード大学): 「宗教と映画を教える際の新しい傾向」 “New Trends in Teaching Religion and Film”

レスポネント:

富澤かな (東京大学)

臼杵陽 (日本女子大学)

櫻井義秀 (北海道大学)

西村明 (鹿児島大学)

山中弘 (筑波大学)

司会: 井上順孝 (國學院大學)

使用言語: 日本語・英語 (英語には通訳がつきます)

参加費: 無料

趣旨

このシンポジウムでは、宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけたときに、どのような可能性、利用の方法があり、また問題点を孕んでいるかなどを、幅広い視点から議論し、意見交換することを目指します。

映画の中にはしばしば非常に興味深い宗教文化の問題が織り込まれています。キリスト教、イスラーム、仏教といった歴史的な宗教を正面から扱ったいわゆる宗教映画は言うまでもなく、喜劇映画、ミステリー映画、恋愛

映画、ドキュメンタリー映画など、さまざまなタイプの映画に、宗教に関わるテーマを扱ったシーンを見出すことができます。

それゆえ学校教育において、宗教文化の問題を身近に感じさせる上で非常に有効な教材になりうるといえます。宗教文化に関わるテーマは中等教育においては、歴史、地理、倫理、美術、音楽、国語、さらには英語といった科目に深く関わります。高等教育においては、宗教学、社会学、人類学、民俗学、歴史学、文学など多くの学問分野に関わります。

その意味で宗教文化教育における映画の活用は多くの可能性を秘めています。しかし、映画は一定の視点から描写されたものであるゆえ、偏見や誤解といったものを与えることもあります。影響が大きいだけに、この点への考慮も重要でしょう。

グローバル化が進む現代は同じ映画をほとんど同時に複数の国の人が観るといことが多くなりました。同じ映画も受け取る宗教文化の違いによって、異なった意味と影響をもたらすでしょう。そうした受け取る側の文化的差異も考慮に入れる必要が増えています。

異なった学問領域と異なった国の研究者が議論することで、映画を教材として用いる上で、新しいパースペクティブが生まれることを期待しています。

問い合わせ/参加申し込み先: 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

科学研究費補助金基盤研究 (A)

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

(研究代表者 星野英紀)

発行 大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学

発行日 2009年8月31日

URL: <http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>

E-mail: infoshubun@kokugakuin.ac.jp